

e	發揮	a	リュウチヨウ
f	織細	b	シヤシヨウ
g	配慮	c	眺
h	シツヨウ	d	ハバ

$$(1)$$
$$(2)$$

問三

問四

問五

問六

$$(1)$$
$$(2)$$

問七

(第二段落)

だが実はエ

(第三段落)

近年、以前

問一 「おぼえ」はヤ行下二段活用「おぼゆ」の未然形、「られ」は受身の助動詞「らる」の連用形、「たてまつり」はラ行四段活用の謙譲の補助動詞「たてまつる」の連用形、「けむ」は過去推量の助動詞「けむ」の連体形。

問二 (ア) 一晚中とても騒がしく盛大にとり行われた葵上の葬儀であるけれども

(イ) このような妻の忘れ形見である夕霧までもいなかったならば、どれほど悲しかったであらうと思って、光源氏は気持ちを慰めさなる。

(ウ) 平凡で取り柄のない子でさえも、亡くなってしまうと人の親はどんなにかつらく思うようだ、まして葵上ほどのすぐれた子であれば、大宮がたいそうつらく思うのはもつともである。

問三 葵上の亡骸を火葬したときに空に立ち上った煙は、どの雲になっているかと見分けがつかないけれども、空全体がしみじみと思われることよ。

問四 ① 藤

② 淵



問一 aのみ bすこぶる cことに

問二 子弟をして以て楷法と為さしむるを恥づ

問三 丁覬の書は十枚でも、王褒が書いたわずか数文字にもその価値は及ばない。

問四 遂に世の称する所と為らず、亦た是れ奇事なり(と)
(遂に世の称する所と為らざるは、亦た是れ奇事なり(と))

問五 丁覬の生前に彼の書を軽視していた者が、丁覬の死後に一枚でも手に入れたいと思っても、もはや手に入れない。

問六 丁覬は草書と隸書に秀でており、顔之推もその書を大切にしていたが、他の人々からは庶民の出のために正当な評価を受けることがほとんどなかった。その結果、丁覬が簡牘に記した文字も梁の滅亡とともに失われ、丁覬も亡くなってしまった。彼の書を軽視していた人々がその書を手に入れようとしても、もはやどうしようもない。(二五〇字)